

## 主題： “とろみ氷”を用いた直接嚥下訓練の報告

副題： 喉頭挙上を観察、記録して

施設名：介護老人保健施設 グリーンピース

発表者：木下 裕介（きのした ゆうすけ）

職種：作業療法士

協力者：近藤修六（歯科医師）、大森雅一（内科医）、上濱可奈子（管理栄養士）

内野志野（管理栄養士）

【はじめに】当施設は「お口から介護」を基本理念とし、リハでも対象者に直接嚥下訓練を実施している。昨年度同様、今年度も“とろみ氷”を用いた直接嚥下訓練を継続していたが、その中で経過良好で、経口摂取を7か月ぶりに再開できた1ケースの報告をする。

【具体的取り組み】対象は、H.23年11月に当施設入所のA様{82歳、既往：脳梗塞(H.23年3月発症)、胃ろう増設(同年7月)、介護度4、RSST1回}。間接訓練では主にアイスマッサージを施行。喉頭挙上を観察し、嚥下が生じる確率(一口につき1回嚥下が起こる確率…以下、1:1嚥下確率)を記録していった。3か月後のVF検査結果から、直接訓練適応となった後は、ゼリーとともに、“とろみ氷”{氷飲料に増粘剤を入れ、とろみをつけたものを、一口分(約4cc)の大きさに凍らせたもの}を訓練用食塊として使用した。間接訓練時同様1:1嚥下確率に加え、嚥下開始までの所要時間(以下、嚥下開始平均時間)、所要時間の健常成人の平均(21.8秒)との差違(以下、遅延率)にも注目しながら、直接訓練を継続した。

【結果】当初3か月間(H.23年11/20～H.24年2/15)は間接訓練(アイスマッサージ)で、刺激後、約7割嚥下が惹起されていた。VF検査(H24年2/16)後、とろみ氷を用いた直接訓練(同年2/20～5/16)では、1:1嚥下確率は100%、嚥下開始平均時間は21.1秒(遅延率-3%)で、ゼリー摂取もスムーズであった。5/17より直接訓練時に加え、おやつとして毎日牛乳ゼリー食開始した。6/18からは、3種のゼリーを昼食として開始した。更なる食形態のアップ、食事機会の増加を検討する目的で、8/24に2回目のVF検査を行った。ゼリー食の継続は可能と判断されたが、複数回嚥下や交互嚥下の必要性が認められ、朝と夜の栄養は引き続き胃ろうより注入することが決定された。10月末現在も、昼食の摂取を継続できている。

【まとめと考察】訓練時、喉頭挙上を観察し、1対1嚥下の確率を高めることに特に注力した。RSST1回、間接刺激後の嚥下惹起7割の方でも、VF後、直接嚥下訓練適応になる可能性がある。A様は、直接訓練期間中、1:1嚥下確率は100%で、嚥下開始平均時間も当初健常平均に近かった(遅延率小)。こうした具体的数値が、摂食機会、食事量を増加させていく際の判断材料の一つとした。食塊として用いた“とろみ氷”は、寒冷刺激があり、一口量が適当で、増粘剤も使用していることが、誤嚥リスク軽減につながっている可能性がある。しかし、手作りのため、品質にばらつきがあり、嚥下に関するデータは参考程度に留まる。そのため、直接訓練の適否等の重大な判断には、VF検査を用いるべきだが、“お口からの楽しみ”としての経口摂取を長く続ける援助をするにあたって、1:1嚥下確率や、

嚙下開始平均時間、遅延率の変動による評価の精度を上げて、役立てていきたい。